
翼とアホと召喚獣

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼とアホと召喚獣

【Nコード】

N5200X

【作者名】

御坂弟

【あらすじ】

文月学園2年生の天野翼はいつもドジばかりでそれが原因で最低な設備のFクラスになってしまふ。

初めての作品なのでミスなどがあるかもしれませんがどうかあたたかい目で見てください。

プロローグ（前書き）

いたらない所もあるでしょうがよろしくお願いします。

ブローグ

ブローグ

とある春の朝、一人の少年が目を覚ました。

「ふうーよく寝た、いま何時だろ？」

枕元にある時計を見る。

時計には8時50分の文字

「あれ？」

おかしい、たしか8時にアラームをかけたはず。

不思議に思い携帯を開くと何も写っていないかった。

電源を押してもつかない、電池が切れているようだ。

「しまったー！！」

と言いながら着替え始める。

そしてパンをすばやく食べるとダッシュで学校に向かう。

息が切れつつも学校に着くと校門に一人の巨人がいた。

「おはようございます、西村先生。」

西「10分の遅刻だ、天野。」

「すいません、先生。」

西「まあ、お前の事だから事情があるんだろう。ほら、お前のクラスだ。」

先生に1つの封筒を渡される。

うまく開かないな、このナイフを使おう。

西「天野、俺は今までお前はアホなんじゃないかと思っていたんだ。」

「何言ってるんですか、そんな訳無いじゃないですか。」

西「たしかにお前はアホじゃなかった。」

おっ！やつと開いた。

西「お前は、大アホだ。」

天野 翼 Fクラス

西「回答欄がずれていたぞ、ちなみにずれていなかったら
Aクラスの上位の点数だったぞ。」

「最悪だぁーーーーー！！！」

こうして俺の最悪な一年が始まった

プロローグ（後書き）

ありがとうございました

主人公設定（前書き）

今回はキャラ紹介です。

主人公設定

天野 翼

見た目 とある魔術の禁書目録の垣根提督

文月学園の二年生、木下姉弟とは幼馴染。
常に服の中にナイフが隠されている。

親とは離れて暮らしている為、家事全般は得意。
普段は優しいが沸点が少し低く切れやすい。

召喚獣

黒いコートを着ていてその上から純白の翼が生えている。

武器 右手に金属製の手袋を着けていて人差し指と中指から30センチくらいの
刃が伸びている。 簡単に言つととある魔術のピンセット

腕輪 「末元物質」

さまざまな物質を作りだしそれらは独自の法則に従って動く。
たとえると鉄製の剣を作りだしてそれに電気を流しても電流が流れないなど。

主人公設定（後書き）

未元物質についてはちがうかも知れませんが、作者オリジナルということで勘弁してください。

1 話（前書き）

今回はDクラスまでです

1話

Fクラス教室

うわっ予想はしてたけどひどいな、まあとりあえず中に入ろう
だれか知ってる人は、おっ秀吉だ

「よう、秀吉何してるんだ？」

秀「今からDクラスと試験召喚戦争じゃ。」

所で何で翼がおるのじゃ？」

「回答欄がずれていてな。遅刻したのは携帯の充電が切れてアラームが

ならなかったからだ。このクラスの代表はどこだ？」

秀「あそこじゃ。」

ん？あいつは

「よう、雄二、お前が代表か？」

雄「お前翼か？何でいるんだ？」

「回答欄がずれててな。」

雄「まあ、お前らしいな。いまから試召戦争だからな
お前と姫路には回復試験を受けてもらう。」

「姫路もFクラスなのか」

雄「風邪を引いてたらしくてな、試験で倒れたらしい」

「そうか。俺は回復試験の後どうすればいい？」

雄「今回お前は休みだ、終わったたら好きなことをしていればいい
だが今回の回復試験では少し手を抜けよ。」

「ん、まあよくわからんがいいだろう。」

回復試験中

テストを受けていると放送が流れた。

『船越先生、船越先生、至急体育館裏に来てください吉井明久君が生徒と教師の垣根を越えた男女の大切な話があるそうです』

明久何やってんだよ。

そんな事よりやばい隣の姫路から黒いオーラが。

『ばきっ』

あ、鉛筆を折った

そんなことがありながら回復試験を受け終えたおれはアイマスクをつけ、寝るスタンバイを始めた。
するとすぐに眠けが襲ってきておれは眠ってしまった

？「翼、いいかげん起きなさいよ。」

ん、このこえはまさか。

優「やつと起きたわね。」

「やつぱり優子か、でもなんでいるんだ。」

優「一緒に帰ろうと思ってきたら、あんたが寝てたのよ。」

「もしかして起きるまで待ってた？」

優「まあ、最初の20分くらいは待ってたけど起きないから起こしたのよ。」

「結構待たせたな、帰りにどこか寄っていこうぜ。」

おわびにおごるからさ。」

優「じゃあラ・ペデイスに行ってみましようよ。」

「オツケイ、あの駅前の喫茶店だろ。早めに行こうぜ。」

ラ・ペデイス

「はじめてきたな、優子は誰かと来たことあるのか？」

優「ええ、同じクラスの愛子達とね。」

「へえ」

優「とりあえずなにか頼みましょう。」

「じゃあ俺はバナナクレープとコーヒーで。」

優「私はイチゴのクレープとミルクティーで。」

「かしこまりました」

優「そういえば何でFクラスなのよ、一緒のクラスになれると思ったのに。」

「ほんとごめん。」

優「まあ、いいわその代わり来週の休みに一緒に出かけましょう。」

「ああ、べつにいいぜ。」

『おまたせしました』

優「そういえば、秀吉ってFクラスでどうなの？」

「クラスのほとんどが女だと思ってる。」

優「さすがFクラスね。」

「ちゃんとみてればわかると思うんだけどな。」

優「女の私より告白された回数が多いのよまったく。」

「まあ、おかしいとは思うな、優子の方がかわいいと思うんだけど。」

「

優「な、なに行ってるのよ／＼／」

「ん？なんかちがったか？」

優「ま、まあいいわ、もう遅いから帰りましょう。」

「そうだな、あんまりおそくても優子の家族が心配するからな。家までおくつてくぜ？夜道に一人なのはあぶないからな。」

優「そ、そう？ありがとう／＼／」

このまま優子を家まで送って行ってから家に帰った。
しかし帰る時に優子の顔が赤かったのはなぜだろう。

1 話（後書き）

すいません、Dクラス戦といったのにほとんどありませんでしたね。しかもそれ以外も酷い出来ですけどたのしんで見ていただければ光栄です。

2話（前書き）

今回はBクラス戦です。

2話

教室

Dクラス戦の翌日、俺は遅刻すること無く学校に着いた。
しかし、教室の中には覆面をした奴らがいた、声からして同じクラス
の奴らか。

『死ね！天野！』

「うおっ！何だよいきなり。」

『うるさい、俺達は見ただ！昨日お前が嫌がる木下さんを連れまわ
すのが。』

「なに言ってやがる。ふざけんな！」

俺は懷からナイフを出して刃の反対の面で思いっきり叩き、気絶さ
せていく。」

『おとなしく死ね！』

「やなこと。」

五分後

『おのれ、次こそは。』

「黙つとけ。」

最後の一人を気絶させると、席に行く

「秀吉、確か今日はBクラス戦だったよな。」

秀「うむ、じゃから午前中はテストじゃぞ。」

「俺昨日受けたからいいや、寝てる。」

秀「今回は出れるんじゃないの？」

「ああ、さすがにBクラスはあいつらだけじゃきついからな。まあ、いくらかてをぬいたが。」

秀「まあ、おぬしじゃからのう。」

「まあ、たぶんAクラス戦なら本気でも大丈夫だろう、ちよつとあいつらの相手に疲れたから寝るから。」

目が覚めると、すでにBクラス戦の準備が始まっていた

俺はやることを雄二に聞きにいった

「雄二、俺なにすればいい？」

雄「ん？まあ今回は軽く操作のコツでもつかめ、すきに動いていいから。」

「わかった。」

雄「いまからBクラス戦だ野郎共、きつちり死んで来い！」

『おおー！』

相変わらずテンション高いな、ついてけないぜ

「さて、始めますか」

ほかの奴らもやり始めたらしいし

「Fクラス 天野翼が数学勝負を申し込みます。」

B「Fクラスの癖に生意気な。」

「Fだからって弱いとは限らないぜ。試獣召喚」

B「試獣召喚」

〔Bクラス 田代良太 VS Fクラス 天野翼〕

〔数学 137点 VS 359点〕

「んゝ、こんなもんかな。」

B「な、何だよお前、Fクラスだろ、何でそんな点数なんだよ。」

「さあねえゝ、それじゃ、さようなら。」

俺の召喚獣は右手のグローブの先のナイフで切ると一瞬で点数がなくなった

「操作は意外に簡単だな。」

そうして俺はBクラスを倒していった。

2話（後書き）

なんかよくわからないところで終わらせてすいません。

3話（前書き）

今回でBクラス戦自体は終わりです。

3話

廊下

「よし！だいぶ片付いたな、ん？あいつらはBクラスだったよな。」

廊下にいる奴らを片付けているとFクラスの教室に入っていくBクラスの奴らがいた。

「とりあえず、様子を見るか。」

奴らの様子を見ていると会話が聞こえてきた。

B1『Fクラスの奴らは来ないんだろうな？』

B2『ああ、だから好きにやってもいいぜ。』

ああ、大体わかった気がする、小物らしいやり方だな

俺はとりあえず気配を消して後ろから近づいていく

B3『さっさとやって帰ろっぜ。』

「ふーん、なにをするんだ？」

こっそり後ろから話かけてみる

B3『なにってあいつらの設備を、って誰だお前！？』

「やっぱりそうだったか。」

Fクラス 天野翼 Bクラスの小物3人に数学勝負を申し込みます。

「

B1 「ああ？こいつFクラスか？」

B2 「こいつバカか？Fクラスのくせに勝負を挑むなんて。」

B3 「まあ、良いだろさつさと倒そうぜ。」

「『試獣召喚』」

「試獣召喚」

〔Bクラス3人 VS Fクラス 天野翼〕
〔460点 VS 321点〕

B1 「なっ！？」

B2 「なんだと！？」

B3 「Fクラスのはずだろ！？」

「おやおや、バカのFクラス以下ですか？じゃああんたはバカ以下だな。」

「それじゃあ、さようなら。」

俺は3人を背中の翼で貫き戦死させる。

「まったく、根本の奴やるのが小さすぎんだろ。」

俺がぶつぶつ言っていると坂本が戻ってきた

「おい、雄二どこ行ってやがった。」

雄「ああ、根本の奴と協定を結びにな。」

「内容は？」

雄「午後4時までに勝負がつかない場合明日の9時まで一切の試召戦争にかんする
行動を一切禁止する事だ。」

「じゃあもうすぐ4時だし俺ここにいるから。」

数十分後

ム「・・・・・・・・・・(トントン)」

「ん？康太か、どうした？。」

ム「・・・・・・・・Cクラスの様子が変。」

「Cクラスの代表はあの小物と付き合ってるらしいからな、協力してんだろ。」

雄「どうする？不可侵条約を結びにいくか？」

「いや、やめたほうがいいだろ、あいつらが協力関係な以上Cクラスに

待機していて協定違反とか言って不意打ちをかけてくるかも知れない。」

雄「じゃあどうする？」

「坂本、今からBクラスに科学のフィールドを張れるか？」

雄「まあ、大丈夫だろう。だが何をする気だ？」

「まあ、今回科学だけは我慢できなくて本気で受けたんだ。」

雄「そういうことが、わかった。お前はBクラスに行ってくれ。」

「りょうかい。」

Bクラス前

「おお、来た来た、さて時間も無いことだしさっさとやるか。」

もう4時まで時間が無い

「しっつれいしまーす。」

根「あ？誰だ？」

「時間が無いから喋ってられないんだよ。Fクラス天野翼Bクラス全員に科学勝負を申し込む。」

根「やっぱFクラスはバカだな敵陣に一人で来るなんて。」

「うるせえよ、喋ってる時間なんか無いって言うてるだろ。試獣召喚。」

根「こんな奴俺一人でもいい。」

「・・・ほかが。」

根「あ？今なんていった？やめろって言われてもやめねえぞ？」

「馬鹿って言っただよ、三下が！」

〔Bクラス 根本恭二 VS Fクラス 天野翼〕

〔206点 VS 1653点〕

「こっから先は一方通行だ！」

根「な、教師以上だ！？お、おいお前ら手伝え。」

〔Bクラス 根本&その他 VS Fクラス 天野翼〕

〔2506点 VS 1653点〕

「数が多くても勝てねえよ。」

俺は未元物質でガトリングを作り出す

根「な、なんだよそりゃ！？反則だろ。」

「俺の未元物質に常識は通用しねえ。」

ババババババババ

あっという間にBクラスの奴らは戦死した

「さて、俺らの勝ちだな。」

こうしてBクラス戦は終わった

3 話（後書き）

どうでしたか、悪いところなどがあればぜひご指摘ください。
もし、面白ければ感想ください。

4話（前書き）

すいません、漢検が近いため投稿できませんでした。
明日あたりから二日に一回位は出来ると思います。

4 話

Bクラス教室

雄「さて、楽しい戦後対談を始めようか、負け組み代表様。

根「・・・」

なんか急にしゃべらなくなったな。

雄「普通なら設備をいただいてお前らに卓袱台をプレゼントするところだが

免除してやつてもいい。」

おいおい、ちゃんと説明しておけよ。

みんなざわついてるぞ。

雄「みんな、落ち着け、俺らの目的はAクラスだBクラスはあくまでも

通過点にすぎない。条件さえ飲めば勘弁してやる。」

根「・・・条件はなんだ。」

雄「条件はお前だよ、負け組み代表さん。」

根「俺だと?」

雄「ああ、そうだ、お前には散々好き勝手やられたし、正直去年か

ら目障り

だったんだよな。」

ああ、それには同感だな

雄「そこでBクラスにチャンスをくれてやる。

Aクラスに試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い、そうすれば設備は

勘弁してやる、ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。」

根「それだけか？」

雄「ああ、負け組み代表さんがこれを着て行けばだが。」

そういつて雄二が取り出したのは女子の制服。

・・・まじで言ってるの？雄二？

なんか胃からこみ上げてくるものがある

根「ふ、ふざけるな！誰がそんなものを。」

まあ、普通の反応だな。

だけど・・・

『Bクラス全員で必ず成功させよう。』

『それだけなら安い物だな。』

『かなり気持ち悪いけどな。』

ただでさえ嫌われてるんだし、そうなるだろうな。

雄「それじゃ決定だな。」

根「く、くるな、変態ぐふう。」

『とりあえず、黙らせました。』

雄「お、おう、ご苦労。」

よっぽど嫌われてんだな。

何の迷いもなく殴りやがった、あの雄二がひいてたぞ。

雄「じゃあ、着せ替えを始めよう、やれ明久。」

明「了解！」

なんだこの状況。

明久に脱がされる根本、やばい、また胃から何かがこみ上げてくる。

「雄二、気持ち悪くなったから帰りたいんだが。」

雄「ああ、わかった。これははっきり言ってやばいからな。」

「もう、ありや生物兵器だ。」

視線の先には女子の制服を着た根本
きもい、きも過ぎる。

雄「確かに、そりゃそうだ。」

「まじで喉まで胃液が来たからな、
ていうかあの顔見ると何故か殴りたくなってくる。」

「あれ一発殴つてもいいか？」

雄「まあ良いだろ。」

「よし、殺ってくる。」

やるの字が違うのはきつと気のせい

「おい、M S マッシュこつち向け。」

根「誰がM S マ、がはあ。」

顔面に一発、右ストレートを決めてやったぜ

根「なにしゃがる！」

「いやゝその顔を見てると殴りたくなつてな。
もう気がすんだし帰るわ。」

根「そんな理由で殴ったのか!？」

「~~~~~」

根「無視するな！」

生物兵器が何か言ってるけど無視だ、早く帰ろう

4話（後書き）

ぜひ、次話も読んでください。

5話（前書き）

ちょっと今回やってしまった気がする。

5話

Bクラス戦後補給テストを受けた二日後の朝

「ふうー、よく寝た、今何時だろ？」

枕元の時計を見る、時間は8時50分
あれ？デジャブ？

「遅刻だぁー！！！」

文月学園Fクラス

「あれ？皆どこ？」

ほかの面子はAクラスに一騎打ちを申し込みになっていた

「ああ！そっいえば今日Aクラス戦だ。」

朝に続き本気のダッシュ、はっきり言ってきた

Aクラス

「やっぱりここにいたか。」

Aクラスを覗くと何かを話している様だった

「わり、遅れた。」

気付かれないように入り明久に話かけた

明「ああ、僕らもさつき来たばかりだから。」

「そうか、ところでなに話してんだ？」

明「雄二が一騎打ちを申し込んでるんだよ。」

「そうか、ところでなんであんな優子は顔色が悪いんだ？」

明「ああ、あれは雄二がBクラスと戦う気はあるか？って聞いたならあれを思い出した

見たいでAクラスの何人かはトイレに走っていったよ。」

「ああ、あれはやばかったな。」

それを聞いたあと、雄二と優子が座っている席を見る。

翔「・・・受けてもいい。」

うわ、霧島、突然あらわれたな。

優「いいの？代表？」

翔「・・・その代わり条件がある。」

雄「条件だと？」

翔「・・・うん、負けたほうは勝ったほうの言うことを聞く。」

優「代表それって私もOK？」

翔「・・・大丈夫、一人ひとつ。」

優「じゃあ、五つのうち三つはそっち、二つはこっちが選ばせて。」

雄「ああ、いいぜ、じゃあ、今日の午後から開戦だ。」

明「ちょっと雄二、姫路さんが了承してないじゃないか。」

ああ？なに言ってるんだ？

雄「大丈夫だ、姫路には迷惑をかけない。」

明「え？どういうこと？」

雄「じゃあ帰ろうぜ。」

「ああ。」

明「無視しないでよ！」

午後のAクラス

高「それでは、両者準備は良いでしょうか？」
立会いの教師は高橋先生か

雄「こっちは大丈夫だ。」

翔「・・・問題ない。」

高「それでは一人目の方は前に出てください。」

第一回は明久対佐藤でなんかノリでかつこいいこと言ってたのに瞬殺

・・・ていうかやっぱしバカだな。

第二回はムツツリと工藤の勝負でムツツリの腕輪、加速で瞬殺かと思われたが、自分で斧の刃に突っ込み自滅

コイツもばかだ。

第三回

優「私がいくわ！」

「じゃあ俺が行く。」

「まあ、雄二は勝つだろうから俺が勝てばたぶん俺らの勝ちだ。」

優「翼の点数は私よりも低いはず。先生、数学でお願いします。」

翼「いいのか？俺の得意教科だぞ？」

優「あんたの数学は300点台だったはずだし調子が良くて400点程度でしょう？」

「さあ、どうでしょうか？」

優「どうせすぐわかるわ。」

「まあ、がんばれ。」

『試獣召喚』

〔Fクラス 天野翼 VS Aクラス 木下優子〕

〔？点 VS 658点〕

「ああ、優子、さっきの400点惜しかったぞ。」

〔Fクラス 天野翼〕

「2000点」

「その5倍だ。」

優「ちょ、ちょっと、どうやったらそんな点数取れるのよ!？」

「両手にペンを持って並列思考で2問を同時に解いてた。」

ほかのAクラスの奴らは呆然としている

「じゃあ、始めようぜ。」

俺は優子の召喚獣を切りつけようとする、しかしそれをかわされる。

「ちえっ、一発くらい当たってくれても良いじゃん。」

優「冗談言わないでよ、一発でも食らったら負けるわよ。」

「まあ、いつまで持つかな？」

少し面白くなってきたから俺は攻撃をしないで回避に専念する、

優「ちょっと、いつまで逃げるのよ!？」

「さあ、いつだろうね。」

優「このっ!」

優子のランスが手に当たる

〔天野翼 1560点〕

「あちゃー、当たっちゃった。」

優「まじめにやりなさいよ。」

優子の召喚獣の腕輪が光る

すると優子の腕輪から雷がでてきた

「うわつと。」

それがおまえの腕輪？」

優「ええ、そうよ、でんきを操り、飛ばすことが出来る。」

「じゃあ、そろそろ終わらせるか。」

俺は剣をつくり地面に突き刺す

そしてその場所から離れる。

優「武器を作るのがあんたの腕輪の能力みたいね。」

「まあ、はんぶんせいかいだな。」

優「いい加減まじめにやりなさいよ!」

優子は再び電気を飛ばしてくる
しかし

「むだむだあ!」

電気は俺の体には向かわず地面にささった剣に飛んでいく

優「うそ！？なんで!？」

「ああ、俺の腕輪を教えてなかったな。

俺の腕輪は未元物質、この世に存在しないものを作り出す能力だからそれでおれは避雷針の役目を持つ剣を作ったってわけ。」

優「何よそれ反則じゃない。」

「まあ、確かにそうだな。

もう飽きたから終わりにしようぜ。」

俺は自分の後ろに大量の剣、斧、槍などを作り出す。

いわゆるゲート・オ○・バビ○ンだ。

優「ええ、そうしましょう。」

優子は特攻で突っ込んできた

「はぁー!!!!」

優「やぁー!!!!」

大量の武器が優子を飲み込んでいくが優子はちかずいてきている。

優「もう少しで。」

しかし、最後に飛ばされた剣によって優子の召喚獣は戦死した

高「勝者Fクラス天野翼」

「大丈夫か？」

優「ええ、大丈夫よ。」

そして第4試合

姫路がFクラスが好きだといって勝った。
うーん結構感動するな！

「後は雄二か。」

優「でも坂本君勝てるの？」

「たぶんむり、フィールドを限定するって言ってたけど高が知れるからね。」

優「なんで教えなかったの？」

「まあ、俺としては別に勝ちたくないし。」

優「えっ？何で？」

「だって勝ったらお前があ教室になっちゃうじゃん。」

優「そんな理由で？／／／／」

「そんな理由って好きな奴をあんな所にいさせられるかよ。／／／」

優「えっ？今なんて？」

「好きな奴をあんなところに居させられないって言ったんだよ／／」

優「あたしの事？／／／」

「ほかに居ないだろ？／／／」

優「それもそうね¥¥¥」

「じゃあ、告白みたいになっちゃったし、返事を聞かせてほしいなあなんて／／／」

優「うん、でも少しだけ待ってほしいな／／／」

「ああ、わかった、少ししたら聞かせてくれよ／／／」

優「もちろん／／／」

ちょうどテストが終わったみたいだ

Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子
56点 VS 96点

うん、予想どおり。

雄「殺せ。」

明「いい度胸だ、殺してやる。」

おいおい明久お前も負けただろ

姫「明久君、やめてください。」

島「そうよ、あんたじゃ30点も取れないじゃない。」

たしかに、でも島田、お前もだろ

明「それについては否定しない。」

少しはしろよ

翔「・・・雄二約束。」

雄「わかっている、何でも言え。」

翔「・・・私と付き合って。」

雄「やっぱり諦めてなかったか。」

翔「・・・わたしはずっと雄二のことが好き。」

すごいはつきり言っなー

雄「拒否権は？」

翔「・・・無い、だから今からデートに行く。」

霧島に引きずられていく雄二、すごいシニールだ

優「翼、ちよつといい？」

「ん、どうした？」

優「ちよつと今から屋上に来てくれない？」

「べつにいいけど、どうした？」

優「少しはなしがあるから。」

「わかった、じゃあ行くか。」

優「うん。」

「それで話つて？」

優「ええつと、翼。」

「なんだ？」

優「私の事すきなよね。」

「ああ。」

優「私もずっと前から好きだったの、だけどもし振られた、今まで
の関係も

なくなっちゃいそうで怖かったのでもそれでも、私は翼の事が好き、
だから、私でよかったら付き合ってください。」

「こんな俺でいいのか？」

優「あんたじゃなくちゃ、だめなのよ。」

「そうか、ありがとう。」

そついうと俺は優子を抱きしめて、触れるだけのキスをする。

「そついえば、なんであそこでOKしなかったんだ？」

優「だって他の人が見てたじゃない。」

「みてたのか!？」

優「ええ、みてたわ。久保君とかがいたわね。
なんか僕も吉井君ととか言ってたけど。」

「そうか、ところで優子、今からどこかいこうぜ。」

優「ええ、そういえば私みたい映画があったの。」

「じゃあ、映画見に行くか。」

優「うん。」

こうして、俺と優子は付き合い始めた

5 話（後書き）

こんなのも面白かったら、感想ください。

6話（前書き）

前回の話で、／／／が¥¥¥¥になってしまっていました
申し訳ありません

今回もちっと、やっちゃんしましたね

6 話

「ふぁ~~~~、今日は時間どつり起きたな。」

最近をよくアクシデントがあつて起きられなかったから久しぶりな気がする

そして学校の下駄箱で

「ん？これは。」

下駄箱の中にピンク色の便箋

これはいわゆるラブレターって奴？

「まあ、後でいいか。」

そして、教室に行き、誰もいない教室で手紙を読むと、

昼休みに屋上に来てくださいと書いてあった

でもこの文字どこかで見た気がする

まあ、いいやHRまで時間あるし寝よ

『『殺せええー！！！！』』

そして俺は前のようにデカイ声で起こされた

「秀吉、どうしたんだ？」

秀「ああ、それが明久がラブレターを貰った事がFFF団にきずかれたのじゃ。」

「ああ、そういうこと。」

きずかれなくてよかった

あれ？何で姫路はちらちらこつち見てる訳？

もしかしてあれ姫路のか？

でもあいつ明久の事が好きなんじゃないの？

まあ、昼休みになれば分かるか

それまでまた寝よう

昼休み、俺は屋上に來ていた

そして、いま俺の目の前にいるのは、やはり姫路

「何かの間違いじゃないの？」

姫「いえ、間違いありません、私は貴方のことが、
天野翼君のことが好きです。」

「お前って明久のことが好きなんじゃないの？」

姫「はい、確かに少し前までは明久君のことが好きでしたが、でもいつの間にか、翼君が気になっていて、いつの間にか私の中で一番になっていたんです。」

うーん、どうなんだろう。

優子に聞いてみないと駄目だしな。怒らないかな、あいつ

「じゃあ、少しだけ時間をくれ、早ければ放課後に呼ぶから。」

姫「はい、分かりました。」

「それじゃあ、他の奴らにきずかれないようにね。」

とりあえず、優子に聞きに行くか

Aクラス

「って事でどうすればいいと思う？」

いま俺は優子にさっきまでのことを話していた。

それを聞いた優子は少し考え、口を開いた

優「翼は別に付き合ってもいいのよね。」

「まあ、俺としては二人と付き合いたいな、なんて。」

我ながらすごいわがままだな。
こんなの聞いてくれるかな？

優「じゃあ、放課後に私も一緒にいくわ。
少し話したいこともあるから。」

「お前としてはいいの？」

優「そのときに話すわ。」

「分かった、じゃあ、放課後に屋上で。」

優「ええ、分かったわ。」

そして放課後

俺は今姫路と一緒に屋上に向かっている

屋上に行くとすでに優子が待っていた

優「きて早速で悪いけど、翼は一回席をはずしてくれない？」

「ああ、分かった。」

きつと女子二人で話し合うのだろう

それから五分程度して優子に呼ばれた

優「それでね、翼、今二人で話して決めたのだけれど。」

そこで優子が喋るのをやめる

そして俺に姫路が抱きついてきた

姫「条件付で一緒に付き合ってもいいって優子ちゃんが、」

うわ、無茶なのじゃないけど

姫「二人を平等に、今まで以上に愛してくれるならいいそうです。」

優「そして、あんたはどうするの?」

「もちろん、約束しよう。」

そう言っ、て、優子を引きよせ、姫路と一緒に抱きしめる

「これから宜しくな、瑞希、そして改めて宜しく、優子。」

瑞、優「「こちらこそ」「

そついつて強く抱きしめかえしてきた。

ああ、明久には悪いことしたかな?

でもあいつの事だから瑞希が幸せならいいって言いそうだな

6話（後書き）

すみません、なんか姫路を入れたくなったので入れてしまいました

明久のラブレターは美波からって事にしてください

清涼祭 1話（前書き）

今回は短いです。

それと、主人公の台詞の前には翼「――」を付ける事にしました

清涼祭 1話

桜の花びらが坂道から姿を消し、緑色の芽が出始めたこの季節
俺は

「すうー、すうー」

・・・寝ていた

姫「ふふふ」

・・・瑞希の膝枕で、

うちのクラスの奴らに見つかったら抹殺されかねない状況で
なぜ無事なのかというと

『こい！須川くん！』

『勝負だ！吉井！』

外で野球をやっているわけで、
そんな事したらもちろん・・・

『貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！』

鉄人が出てくるに決まってる

そして数分後には全員が教室に連行された
もちろん瑞希からは離れてるよ、

あいつらはカスだけど量が多いからめんどくさい。

まあ、そんなことは置いといて、今は清涼祭の出し物決めをしている

雄「さて。そろそろ清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない
時期が来たんだが、

とりあえず、進行並びに実行委員として誰かを任命する。
そいつに全権を委ねるので、後は任せた。」

雄二の奴、滅茶苦茶どうでもよさそうだな
自分の興味の沸かないものにはいつもそうだ

姫「翼くん。坂本くんって学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

翼「興味のある事にはもつと積極的に動くからな、多分そうだと思う。
」

姫「そうなんですか……。寂しいです……。」

瑞希にこんな顔させるとは、

雄二……。後でお仕置きが必要かな

姫「翼くんも興味が無いですか？」

翼「俺は瑞希と優子と一緒に思い出を作りたいかな。」

姫「私も翼ちゃんと優子ちゃんと一緒に思い出を作りたいです。」

翼「ああ、いっぱい思い出を作ろうぜ」

姫「はい、ケホケホッ」

瑞希が咳をし始めた、顔も赤かったし、風邪か？

翼「風邪か？」

姫「はい、すいません・・・」

最近よく咳をするな、

こんな不衛生な教室だからな、不思議ではないが

翼「あんまりムリはするなよ。」

早く何とかしないと駄目だな

でも優子にこの教室じゃ変わらないからな、

今度雄二に相談しよう。

清涼祭 1話（後書き）

面白かったら感想お願いします

清涼祭 2話（前書き）

今回も短めです

清涼祭 2話

瑞希と話した後黒板を見ると3つ意見があった

『候補1 写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補2 ウエディング喫茶「人生の墓場」』

『候補3 中華喫茶「ヨーロッパ」』

・・・何があつたんだ？

鉄「皆、クラスの出し物は決まったか？」

（あ、やばい今黒板には）

西村先生は黒板を見て一言

鉄「補修の時間を倍にしたほうがいいかもしれないな。」

まじすか？

優子たちといられる時間がなくなっちまう

そんな中意見を言い始めた奴がいた

『せ、先生！、それは違います！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

皆、補修が嫌なのは分かるけどそれはないでしょ。
そして最後の奴、残念ながらお前らはバカだ

鉄「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

さすが西村先生

鉄「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

これは予想の斜め上どころか、真上に突き抜けたぞ

鉄「まったくお前たちは……。少しは真面目にやったらどうだ。
稼ぎを出して設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

ごもつともです

その後、バカどもがまた騒ぎ始めたが、島田の進行によって
中華喫茶をすることになった

清涼祭 2話（後書き）

感想をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200x/>

翼とアホと召喚獣

2011年11月13日21時04分発行